

和訓栞

美之部

三十

和書門類			
二	一	八	二
六	〇	八	一
五	函	架	號
一	冊	冊	類

內閣文庫			
二	二	和	
六	一	書	
三	八		
函	二		
四	冊		
架	號		

內閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (26)
函號	263 10



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



訓美くも実の義也説文の鞋ハ草木實鞋也と云えあり○我を
とらふ事晋の対より云えあり世説かとも多し○箱の底とらふと
身の義あり○古事記に見立見畏見驚見喜見感ふと見とつけて
らふ古語也○倭名抄は猫とあり今みかぬきといふ也新撰字鏡は
ハ格とあり本草と猫權貉三種大抵相類とあり○又鯨と訓あり
鯨属也と注あり今みぐいとあり東國よくき魚といふ○已ハ十二支の
蛇と云とらふ其略也○箕ハ皮殼と云く實カミハ器と云く名も
ハ新撰字鏡ハ靴とあり○二ハ見ハみ系臣ハ積ハみ水ハ
ミグの略也○名ハ相と云く藤良相あり女の義也○尾とみの音ハ
万葉集に云えあり微味の例也吳音成

△みりま 賀茂の祭より御生とも御形とも云え或ハ御霊ともあり
みあまの目とも云く云えあり俊成

よとぬやう今日の目言れ来とも賀茂のみりまはあまの目なり
申の日に早稲祭とて同日賀茂の祭を言れ候なり此日とみあまとて西に日ハ

そのみあまといふあまの依りあり○風雅集にみりまをよみあり
かけしとも云えあり○みりまはみりまを野賀茂よりあり○みりまは
とも云えあり賀茂保憲女集より日ともみりまといふとあり
みりま 神代紀は饗とありみりまをて称する也古事記は天御饗と
とも云え

みあり 日本紀は殿とあり御在所也みありと云え云々集は
御在香とあり古事記は御舎とあり古語拾遺は造殿忌部所居謂之
鹿香古語正殿謂之鹿香といふ祝詞式は御殿と云也○延喜式は
御殿守之也
みりま 神代紀は合文とあり身合の義也婚とみあまといふも
同古事記は目合とあり
みあま 日本紀は燃燈とあり佛家といふ倭名抄は燈明とあり
あり訓あり
みあま 日本紀は苗裔蹴鞠とあり御名末の義とあり

ふくしうの古語也

みあへうー 禊火祭祝詞に見河波多志終し之ゆあへく意荒と申

也しつり或ハ波多志云とてしつり

△みられ 源氏よとてまのほとあくとつるハ小家の体の奥まてへ入

らまるとしつり

みのち 身命の事也日本紀よんえより大智度論よ設滿世界宝无有

直身命とてゆ俗よ命ハ宝としつり是也又音もつり

△みうら 古語拾遺よ二季御つゝつ即御体御也龜トとて玉体よ

御つゝとてつゝんこつ成つゝつひ奏する也○三浦ハ相摸の郡名也三

浦大カ義明ハ平姓也八十九とて歳死と百六つハハ語也身義實と亦

八十九とて終つゝつり

みうらぎ 源氏よとてゆみうらぎの人枕草紙よみうらぎまおらせたまふ

て日中行幸よ御手水の間よみうらぎ人めまるとんえつり花鳥よ藏人

私記よ御書御髻事侍臣之間撰堪事之人供无定例皆着當色他謂之御

往て今按所もつてあひんよまわらんハ念のきぬけ直衣とて侍候を
るをぬうちきの人とつり也とんえより

みうせぬ 日本紀よ蕨とよめり身先ぬの事也選却崇神祝詞よ五處よ身

亡まるとんえより

△みえぬ 見とつてみえぬ反ゆ也又不見ともゆり○とてハ万葉集よ所見成

とあり○羽州よとてえぬとんえふくつりハ古語のまゝとる也

みえがくれ 古今集よゆめり今とつりハ詞也

△こと 古事記よ坂之御尾とみゆみハ護語み保のみと同一又みハ真も同

水尾とちうハ水のふうと下也とつり范大成詩よ肯作山腰水尾末とんえと

又水脈とてとめり延喜式宣命よ水脈と教導賜へく宣ふとんえとつり俗

よみとつり見也○雲のいと雲のいとふくつりハ水尾よ喩てつり也○近江

國言嶋郡水尾村よ水尾神社あり神名帳頭注よ南水尾ハ猿田彦命河内社

ともしハ河北ハ天鈿女命也兩社水尾川を隔つりとて

みとつり 日本紀よ進食とよめり御食物の事也古事記よ食御糧とみと

一とるこよせり

みとつこく 濤標とあり万葉集に水咫衝石とあり吹とびとつこくハ
心消うく 水脈ミヅノキの籤ウケの義カミあり一尺寸と記し一木と立置て水の浅深を量
る物也といふ延喜式に難波津頭海中に濤標と云ふ一土佐日記よみと云
く一のりけ出くといふ是也云々其の遠江よとあり引佐細江の
をほく一と云ふ氣質の閑さく行舟よと云ふ入江也○濤ハ水零二合も
て水尾の義と取あり一宇昏の凶義よと云ふす首子ハ水行者表深表不明
則陥注ハ表標準也と云ふなり

みとるあめ 身と知る也れりいひつる身と知る也つらからよふもるあめ又
祓とつこくといふ古今集と云ふそ世人身と知るもつこくみつくと顯昭と云ふ伊
勢集よ
かみもつと知る也れり一我我と云き以君もつこくかえ

みとるあめつら 大神宮式に三節祭と云ふなり六月月次祭九月神嘗祭十二
月月次祭と云ふも外宮ハ十六日内宮ハ十七日也俗に三祭礼と云ふ

みとりのみき 建武年中行事よと云ふ北山抄に甘槽也用青菴蓋不洽臣

下とる也一各一甘槽三杯一杯糯米一杯黑米一杯白米といふなり
みとりのいふ也といふ醞酒成やふかと云ふ如く三節酒ハ白米黒米
糯米よと造る大同の詔に正月者三節豊樂御食と云ふなり○三節會
ハ元日白馬踏放也

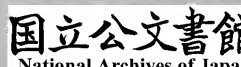
みとるあめつら 水尾速くふつとの義成と身と速くと穿つと云ふ
て身とむくはまの意也といふなり

みとびとのあめ 和名抄に水脈船と云ふなり万葉集に堀江よみと云ふ
きつと云ふもつと云ふなり今水と云ふなり先小船と云ふ水の浅
深と云ふなり延喜式に船到緑海國濤ミラヒキメ引令泊場と云ふ記あり
△み 日本紀に甕と云ふ新撰字鏡に瓮とも甕とも云ふなり
義のあめ略をへ一釋と云ふ上古物の大なりとみかへり甕星甕粟あ
是也と云ふなり一説に甕星も甕粟も嚴星嚴粟の義なりと云ふなり
相通ふもいなり○延喜式に脹字と云ふなり甕の誤字あり一倭名抄に

こえり瓶也○みるのりうたふくはるの鏡とくくもよめる左也みるの
 へし鏡とべしとらふとそと也くはく祝詞式上高知瓊腹満並とせ
 るそ本家ありん支酒と醸たる張ふり神よなるはりてがく云り
 みかど 御門とまり陛下闕下かしくり日本紀上人主王室天闕國
 家朝廷日本國中國ともより靈異記上闕とのこもりり○古事記
 神朝廷とく少神宮とせり○御門条ありこの禁門とらふとて四
 方内外御門と祝詞とく内中重の諸門外宮城の諸門也○万葉集
 一みこの御門もええり

みかど 國の名よふ男川豊川矢作川の三大河ありとりて也くはり○御川
 池の外宮神前の川也夫木集よこく生れみふは池のあやめまきりり是之
 ○兼輔家集源氏抄草紙よく禁秘抄御厨人と云たまふり不浄を
 生好の絹二幅と縫くあつ端と結合て凡とひちよけ持女也とい
 たり入り俗不浄の指とれりといふは云々
 みくく 同仇の在りし御方とまり古事記よ出り身方と云ハ後世

のま方り了西土よ同人といり関字とよめる心得り○材木の
 みくくといふ身方の春日のあつと水のほりぬ方ふまの木ありとて
 いてよ対せり○持統天皇の時御方といふ姓と云えり○神代紀よ
 彼神之象といふ鏡を指ていふ也神道よ像とて又延喜五年
 よ國の諸社よ神像と入るも一木あり當時たまく神像あつた多く
 の大永亨祿の細くくえ唐風の冠装束とる也丹後國古謝郡板列神社
 とと板並山ありまれの列とるも一訓まへ今男山よまへて八幡神
 とす神像ありて威嚴崇く尊む了又月神の御像の木禁河の谷よ
 くとえ三輪の御供所よ三神の像ありてふく古像也といり三代實
 録よ大名持女彦名の石像のまるとり○新撰字鏡よ佛とみくくとよめ
 る御像のまるとり○みるが原の遠州也
 みくく 出雲國造神賀詞よ天張和齋ぶりてとて和の方集よ
 の音よめとくみるのま上支の伊豆は真屋よ對しとらふとくみかど
 とよみて神酒とみくくとよむ意とせり説心得り



百歳の石の官の御新丁民の御多くと云りひよりり

みうらみづ

源氏古今集ふと云えり孫叔向の詩一道泉流繞御溝○御川池八齋宮

あり禁海と云えり孫叔向の詩一道泉流繞御溝○御川池八齋宮
式よゆえ長説よ豊受の御前を流通る川はり今八あせく池と云
と修々木集よ女御徽子女王の予よみかひの池乃菖蒲草とよみた
まへる見也

みかきよりり

御垣守也衛門の系よて衛士をとりし神代紀よ不離

天皇宮牆之傍と云は是也衛士のたぐ火の宮衛令よ其官門皆令衛士
炬火と云も衛士八軍團の中軍事をあつたせ見と兵士と云其兵士
の中よて京と云りて衛士と云ひ太宰府へ遣さる御防人といり
○能宣の御垣守の秋男の胸のゆえつと思ひよ心きと消つと云る
かみくも也と云と官門よ衛士の焼火と喻され夜にゆえつと云る
つと云り身三一本は秋にゆえつとある誤也此てよと云はよ夜と
ゆえつと云る消つと云るをとりよのゆえつと云るてよと云る通る例

也後撰集

かくあつちと云り甘と云りおきと云り眞消ぬる雲と云り

身三句以下是よ似てよとけり別也といり

みかんかぎ

御巫と云り又と云かんことと云り神と齋きと云る女と云男の

祝よ同一今此神子の類よあつと昔ハ大御巫生嶋御巫坐摩御巫御門御

巫ふと云り今ハ詠ぬ

みうらみづ

三笠山也大和春日よみり○神護慶雲二年よ鹿嶋香取大神

三笠山よ宮造りよと遷よまんと詔ありて成りて祝詞よも其多と述と
よさよと記よハ公事漏りり○大中女將の美名よとよめり堤中納言宰相
将より中納言よありて賭弓の四りり此日よとくさのみさの山にゆけと
とよめりよりの事よ秋松よと云り○檜垣家集よ筑前のこよと云ひ
山といひるると云えり

みうらみづ

古事記よ見畏と云る見て驚きと云り

みうらみづ

源氏よえは倭名抄よ園人をよめり守門者よ注を侍中群要

御門守とちり衛門府の下入属とる門部の取是也

みかどまつり 式は御門祭にり荒ぶる物の入あふんを防むむとてなほ也中古

まての毎年六月十二月の大殿祭御門祭にり今大嘗會にあてて居たま

つるちり 日本紀の朝参をより

みうどまわり 日本紀の朝服をより

みうどのみ 古事記の天石戸別神亦名謂攝石窓神亦名謂豊石窓神此

神者御門之神とて也舊事記の天太玉命之子也とらり國史貞觀中阿波國天

石戸和氣八倉比咩神又大和國高市郡天津石戸別神社丹波國多紀郡石窓神社

二座とてえとらり攝石戸の系和魂也豊大の系荒魂也とて新年祭祝詞とて此

二神名を奉ぬ

みうのよのちり 後拾遺集のまの夜のとらひのうらと讀む皆礼後三

箇夜の餅のまを二月三日の艾糕よとせとる也源氏とてえとて按二塚娶の三日

あつる夜餅を枕うとてままとらり又とて餅のトとえとらり

△みき 古事記のテよとらり酒と通して今神酒とらり

沖也きいこの略和れつとらり酒とらり也流球とて酒とみきと

よふも我邦よりの傳へる語かとらり○今造酒を訓を大神宮式は清酒

酒造とてえとらり清酒は白御酒也酒造は黒御料酒作請とてえとらり○幹

とよむの身木の系也○日本紀の棺とてらり見も身木也人木とてらり如し

○古語拾遺は其採材忌部所居謂之御木とてらり紀伊國名草郡也○三

木城は播州に在

みぎり 右とらり南面の正位をりてとらり右の西よとらり日の入をえ浪の

系ありとらり○砌とてらり石垣をつむこととてふれと雨雷の落る聲下

の砌よとてらり水際の家ありとて俗は其扉のまを其砌ともらり

兼名苑は一名階とてらり

みぎい けとよらり水際の家也唐韻よとれ也新撰字鏡は濱が水

ぎいとてらり

みぎいまさり 源氏よとる今も水際のみとてらり如くけ勝の家成と

の妹は海人の親王始也と○神代紀に流とよめりも御子の系也○神子
とよめり巫女とらふ也祝詞式に巫とらんとよめり神子の系は信言
に其略也楚辞往に楚人名巫為靈子猶言神之子也と云えり同意也○俗
語みこくも信言也○平判官康頼の筑後守と云えり子と神子とらふ
覚禪房采尊是也○法興院の園白大と信言るお臥の神子とらふとの大後
よええりり切ふとの下考入今と入

みこく 神代紀に至貴と尊とらふ自餘と命とらふ皆みこく祝
ええりり神代紀に至貴と尊とらふ自餘と命とらふ皆みこく祝
のみこく母のみこくなと云えりり下通してまこととば用おらる
とらふ古事記に尊命のよめり皆命とらふ神賀詞に已命と云え
えぬ又天皇命とらふに續日本紀宣命よえりり万葉集日並斯皇子尊
高市皇子尊と此例也とらふ後世かこくも同意成へり○命令
ともいふ古事記に請天神之命と云えり又天神詔命以て祝詞に命
以て多く云え初崇神詞とて天津神能御言以底とらふ御言の系みと

のつふとらり

みこく 神代紀に至貴と尊とらふ自餘と命とらふ皆みこく祝
新勅撰集よ
足川のいづる山の日のけまかこくも林らみこくかこく

○仁壽殿應神天皇の御興建保二年の災よゆつて東鑑よえりり
天子よ鳳輦とらふ形かこく飾かこく神興の如く舉行を興とらふ輓
行を輦とらふ○みこく岡北野の西南よらりて久き高野御後のため
野行幸あり後撰集よ
みこく岡北野の西南よらりて久き高野御後のため

かまろくれみこくの神系系集よとらひはる秋よ今の睡越也とて又安
よ稲村の崎と云えりり
みこくろ成 万葉集よ御心手とらひく吉野の枕辞とせり御心とよ
せとほろちと心ありとらり
みこりり 水かとりり古事記よみくまらりとて訓カ久麻利と

るえり水くりの持せる詞あり水分神ハ其徳を称せる也古歌

みこもり神よりへてきとく悉くあり何のほみやは
○みこもりぬふくは六水原の系也○万葉集よりみこもり水分山とあり
る文武紀より吉野水分峯神也式よりみこもり水分山とありと今丹
治村に堅くあり万葉集より

神さる盤根より三芳野の水分山とありと

みくまると訛て神子守の神とあり一六帖花子みかへんえてみくま
くりりくくくくくくくく山邊郡都祁水分神社より都介山りり
葛上郡増村よりみこもりと云所あり祈年祭祝詞より水分坐皇神等能前

尔曰久吉野宇陀都祁葛木登御信者白氏と是也又宇陀郡より宇大水分神

社式より高見山とあり平井村より巖頂に至る五十町とあり建水分神

社ハ河内國石川郡水分村とあり

みこりのり 詔勅とあり即宣命の意式の祝詞より天津神能御言以
ととえり神代紀と教とあり北山抄と臨時大事記と詔尋常小事

為勅とえり御言宣の系也續日本紀より天皇詔旨今勅御事法者
とと中臣後と宣別とと

ととめり 日本紀より案字司字とあり御言持の系命と含
んで天朝よりある人とあり也万葉集より君御言と持てありとあり

みこのりや 古今集より日本紀より東宮とあり○倭名抄より春宮坊
とみこのりや乃つとあり又主殿署みこのみやのむまれつとあり

△みさき 日本紀より碕宇岬字とあり大先の系抄より倭名抄より
行とあり水先の系とあり○大神宮式より鹽焼とみさきと訓あり○

書紀より嶋曲俗曰美佐祁とあり

みさき 日本紀より京師とあり又みやとあり訓あり宮里の系みやとあり

ふかき 京師より一條より九條の制あり周礼の都城方九里國中九經
九緯とあり起より拾芥抄より條起徒北行於南里起徒西行於東とあり

海東諸國記より元明天皇七年始定京城條里坊門とあり三代實録より十二條
十二條等の称あり九條より限とあり

みさき 操をとりて後拾遺集に衣かざる竿よまたり躬竿のそりて
 操行の直まざるをとりてやとらり社子津人操舟若神とらりよりて
 水棹より出するもや千字文の節義の字を訓し靈異記の風聲又氣調
 とらり日本紀の孝とらりあり○水竿をいり船よら詞又手棹より○衣
 らり身竿のそりて身よけふらりあり○保氏よみまつらりてとらり
 元名よまらざらりかかする意也松の操しりも雪霜とらり常盤ふらりと
 後拾遺集

あつらふよ又ぬきかぶらり各みまららりけりありて

みさき 大坂のそりて藤白のみさき信濃のみさきふらりとも也木曾のみさきと

らり万葉集の神のみさきとらり又ゆ

みさき 万葉集に見放しありてけり遠きうらり振放見しりも同意

みさき 神代紀の方とらりあり正盛のそりてへりむらりともらり

みさき 日本紀に陵又山陵とらりあり御校の城のそりてへり校に城山の

ま 顕宗紀よるえ墓よ城とらりま漢よとらり○南都元明天皇の陵邊
 七足の石狐らり其所以と知入れり或は狗人ふらりともらり今四箇ハ谷よ
 らり○大和の諸陵多し皆南面也た吉野後醍醐天皇の陵の北面也と
 らり遺教のより太平記よるえり塔の尾の陵と如意輪寺の堂のらりま
 まらり○宇多帝以來ハ山陵と置まらり遺教よりて○倭名抄に諸
 陵寮とみさきけり○神代三陵ハ帝都東よ遷らり山城
 葛野郡田邑陵南原よ逆拜の地と定て祀とらり式よ北城四方一町のらり
 今葉室山の南廣野の陵村よ其墟存と神武天皇以下の山陵と其靈成祭給
 ふ藤原吉野の奏言よ山陵猶宗廟也継元宗廟臣子何處仰是と以てえり
 代り人主山陵の外別の靈祠ふらりよ故ありて祠ありり別のまらりて後世の
 典故といり

みさき 御侍也古今集陸奥がらり

みさき 宮城野のこれト露はるまらり

是ハ和らりて按察使節度使國司たり任よ下向の時多賀城よ入て國府寺よ

餐應の日先白山の宮詣の式ありて是れあつたるのまげよと沙洛の司よ告
る辞也むかひ国府寺よ公人侍待の被官千人よ及つりよそふれ名よ本の
とらとらとら

みまづつと 和名抄よ京職とよりり左右りり朱雀大路以東京極ま

てと左京とて洛陽と擬へ朱雀大路以西と右京とて長安と擬よよと
東京西京の名と起りり

△みまづぶ 萬葉集よ水袋とよも水のふみたる然らつり田よのこやよ

とらよや玉吟よ

片山のやらのと成田とや吹よまよや田まけかよぶはくん

みまづ 御修法の音也圓登よ始る正月よ禁中よ行りる也とて真言

院よて行りるよと今其院ふととりて紫宸殿と用わつる埃囊取よ
元日より七日まで神事多とよより出家参内や八日より始り御修法

ふたは夏と後七日とよとて源氏よみとほつとてえよ侍中

群要よ孔雀経法尊皇王法熾盛光法金剛童子法大元法北斗法安鎮

國家法請兩経法不動法降三世法軍荼利法大威徳法金剛夜叉法尊
勝法藥衣観音法とてえとら○御塩殿へ伊勢二見浦よある社也長明

みまづ 攝津伊豫伊豆より明神まよ攝津へ神代よりええ伊

豫へ越智郡のつ也大山祇神と多る伊豆へ伊豫より遷るとして攝津國
嶋上郡三嶋鴨神社三嶋江村よあり○三嶋暦へ伊豆より出ると然らよ○茶碗

よ三嶋よとらりり堅よかえ兒紋ありて三嶋暦よ似りり是と始り

高麗の品也

みまづ 短とよりり多くかくちると万葉集東予よみぢかきと

ちり身辺のまよとらと布能未知可父成とてふふ而已近くてのま也

とらり証とて入りり

みまづ 日本紀よ肅慎とよりり後漢よ挹婁とら唐よ靺鞨と

らひ宋よ女真とらひ元明よ女直とらひ百一也西土朝鮮の東北よあり

其末蝦夷の地よ接とらり坪碑よ去靺鞨國界二千里とてい

御簾の義也或ハ翠簾と云り

○

△みす 簾といふ御簾の義也或ハ翠簾と云り ○れはひみそいふ物まゝすけよええり ○みまきあけと源氏に云えり香爐峯雪探簾者といふ意也といふ ○御簾といふ事古事記に云玉座といふと神宮と相殿の美須あといふ ○見との義あり万葉集よ吾大王の所^み見^み為^み背^み友^みの國又見え賜を云えり

みとまほ 神代紀の次よえ御統と云り是也よてたまひをまろはとつと語通^り纂^系疏^よ以^り絲^貫穿^總括^之也と云い

みとらり 皆禮の始め丈夫よりナリト云ひ艶書と通りて後よ翠簾入^りて丈夫より婦の方へ通ふ是日本の風俗也其昔古事神武記日本紀仁德紀履仲紀かといえりよて舊記よめ入の式と載る事ナレ^り ○姫宮の御入輿の時みを入^りて撰家へ御入輿の時へ姫宮の方へ行^りて御所よ一宿ありて翌朝退出^りて是と御簾入^りとらふ其後姫宮御入輿^りる事也 ○戸令よ凡男年十五女年十三以上聽婚嫁と云えりま^つと漢土よ同^しと云

みとらる 万葉集よ水簾列と云りみとらる真簾の義と云きと云

成^り神代紀之野簾と云えり今の本よみことと云^り一^つは信濃と云^りり^り後世の秋よ信濃ある徳屋のとき那^らし^める意^はや鷹^ハ鷹と通り^てま^つ竹の事あり^てま^つ竹の事あり^て同物よよれ^り語意^{あり}野^はり^り野とず^らら^るはけ^りあり^て又鷹^ハ鷹の誤也篇海よ鷹^ハ黒^竹也と云えり

みとらる 伊勢物語よみとらる人^と云^ふ事^{あり}と云^ふ事^{あり}

あ^らひえつ^りも^れく^り説^きい^ふ真^名本^よ見^爲毛^不有^見裳^不爲^人と云^ふ事^{あり}見^爲鳥^と云^ふ事^{あり}万葉集よ据^とと^る事^{あり}と云^ふ事^{あり}成^すて^いへ^り

みとのあ^らひ 加茂祭の日簾よ多^くあ^らひと云^ふ事^{あり}兼^推々^の事^{あり}

あ^らひえつ^りも^れく^り説^きい^ふ真^名本^よ見^爲毛^不有^見裳^不爲^人と云^ふ事^{あり}見^爲鳥^と云^ふ事^{あり}万葉集よ据^とと^る事^{あり}と云^ふ事^{あり}成^すて^いへ^り

△みせ 日本紀よ屯とみせと訓と綿^二竹^也 ○賈販の店と云^ふ事^{あり}人^よ貸^す物^と令^見の^義也舖^面と云^ふ事^{あり}郵^とも^云ふ^事あり庭^訓よ^せ棚^とも^云ふ^事あり

日本紀よ屯とみせと訓と綿二竹也

○

又たかともいなり ○みせ川、伊勢の河濃川といなり江次より渡安濃川三瀬
といなり神宮より治の古道くけとく 一度會郡の又川の川止の見瀬川
といなり河といなり 丈夫集よ

終焉のしせつよかよふ三瀬川乃をせよ人よわぶよろろ

○度會郡の三瀬城、伊勢國司具教の築く所なりてあよ於て生害
及り世記よは御瀬社定給とく ○大和高市郡の三瀬村、古の身夜也

△みそ 倭名抄よ未醬俗よ味醬よ似る轉訛なりなりなり

味醬の字三代實録よ出たり或ハ唐鑑真和尚のありし時けと食く美
ありたりて未曾有と嘆せしなり此名なりともいなり後人酥醋味噌

ホの字と造たり宋孫穆雞林類事方言醬曰密祖といひ武備志中山
傳信録も醬と譯して彌波と見えたり高麗醬の名よりなり

と韓名なりへー又白みそなり又周礼逸篇よ乾醬捏製懸電上三十
日而即熟碎而煮五菜と見えたり玉味醬の制よ同一或ハ赤みそとい
又五斗みそなり ○みそと日なりとも香ともいなり保氏香づく

日なりともいなり香なりて此香こといれみ入る香なり白みそと
て也 ○きのふあきなりなりてまわあすみその連歌著別集よあなり

○海入藻芥よ上臈の上なりきとみそのみやくきなり下品なり
二条良基公の作也と見えたり俗よ人物具し又みそをいなり

諸もい意也 ○みそとも坊主といなりハ霞を和尚の頌よなけり
の頌ハ夜の聖よ出せり ○みそハ伊勢又川乃ト流ハ暢長明

さうちハみそハ濃きとハ坊のゆるま成てけりなり

みど 溝渠をよめり水裾の衣ハ新撰字鏡よ玩もよめり
同書よ掬をみどなりなり ○神代紀よ衣をよめり乃ハ海の

衣ハ一祝詞よ御服とも見えたり ○北條高時の將よ横溝其ハ
みど

倭名抄よ霞まき雲ともいなり水あきとれ表語
孫愼も雲ハ雨雪相雜也といなり新撰字鏡よハ深といなり日本紀
よハ雨水とよめり

みだり

みだり 乱とよみりみだりみだるとも云へし道乗るれ成へし○圍基
みだりといふは鬆とよみり○字彙云詞之卒章曰乱者理也所以發理詞意
摠攝其要旨也といふ

みだりめ 奉為の字とよみり日本紀以下に國史は多く用ゐるをいふ
とて梵字とよみり通鑿深武紀に云へし

みだりよ 妄切漫漫根滋謬とよみり妄らうと明けは護たすは漫
つこまら瀝なききりい謬はまらうらふまらハ昔漢多の意也漫漫相通
又浪とよみりまきりのふき意也

みだりし 日本紀云祝詞は御言とよみり漸執の義也万葉集云御執
梓弓こそえあり御へ天皇よかろ御執の同い叙と御佩のつらとらつた
○みだりし川の筑波より式より出雲並に於神社の社下に出海手洗の義
又た也嚴嵩ふとみだりしといふと同一いと去と韻通又神前
はいつてみだりといふは甲勢物語

垂せり 川よせり 垂せり 神さけり 垂せり
この古今集よ末と神さけりけりもありのたしりもとあり并盛家集よ淺
皆ありみだりし川とよみり春日社の慶賀門の内よあり秋合よ京極
御息所

春日野のねもみだりし川よせり 源氏よこひ常よ根籍とよみり文集の浪迹をいふ
みだりまらり 日本紀よ招魂とよみり○日中行事よ日ごとのせり
の御まつり今とよみりまらりまらり魂まつりのまらり同意
みだりまらり 源氏よこひ常よ根籍とよみり文集の浪迹をいふ
靈異記よ瀝をみだりまらり

みだりまらり 日本紀よ恩頼又皇靈之威と訓や御賜の殖る
也よて万葉集よとあぬのみだりまらり○後よと
して御魂のまらりて秋多し曾丹集よ
いよまらりかみたまきりまらりまらりまらりまらり

奥義抄に歳の終りよ亡魂を奉りて恩徳を報とて却魂の事と云
 所謂荷前祭也といひり除夜の亡魂來といふ事ハ報恩経に云えあり
 △から 道路をいふ神代紀に術方もいふ皇代紀に字業もいふあり又
 充され往て有るがくもた意也といひり爾雅に道直也注に死
 屈也といふ道又導と同一とらぶく也○神代紀に御路と訓わり御
 路といふ也といひり○神代紀に海鹽と訓わり本草に其皮潮物とい
 自ら毛といふといひり○訓わり北海に生る其皮をて軟也とい
 たり蝦夷の方言よあもといふといひり大さ二歳駒といふ有る
 面入のいへ手四指あり尾ありうしまた十日か居て行方忘れ
 を腹の毛黒く背赤ありて鼠色也といふことみちの類といふをて
 ふうといふ○蜜の音もいふ日本紀源氏物語かと同一註百花といひつめ
 て醸成との也本草よ己る糞を用うといふ入の瀾を用うといふ皆謬也
 一篤信の説也又在入家作業監収養之といふ本邦も同一

みちのく 万葉集よみち陸奥といふ倭名抄よみちのくといふ
 國号れ義字の如く俗よみちのくよ又むつのみといふ事いふ
 ねー續紀に陸奥國上治郡と今此郡をい

みちのくち 道に也を國よ前と稱するハ皆かく訓わり皇都よ近き
 と口といふ也東鑑に伊勢國道前郡とありも是也道と七道といふあり

みちのあり 道後也九々國よ後といふそのハ皆かく訓わり神皇雜御集
 小負辨三重朝明と道前三郡と神三郡と道後といふると公義也○古

みちのくがき 源氏よも權紙也抄よもちけのきよみのやといふ事
 の始め奥州よ抄をりて名くといふ事いふも是也中より

△みつ 權紙明月記よ之也

△みつ 權紙明月記よ之也

人生三子主大平とらるる意ありて近きはと伊勢の久居の賤人男
と出生入死の存在を○伊勢の三子山蓮胤伊勢記より東鑑に
伊勢三箇山と亦是也式伊勢鈴鹿郡守山神社より此山上あり瀨
織津姫伊吹戸主速佐須良姫三神と祭るるといふ蓋三神鎮坐
据出片よ伊勢と近江との界の山とて也今鈴鹿社と合祭
倭姫命と四座と

みづか 日本紀に瑞穂とてえり嘉永の春とてえり
詞也○新撰字鏡に滲淚とあり水流轉聲勢とてえり
みづぬー みぬーとてり式山城文世郡水主神社十座とてり

就中同水主坐天照御魂神水主坐山背大國魂命二座預相賣系
とてり姓氏録に山城天孫水主直火明命後也火明より山代根言
て都て十世也舊事紀に玉勝山代根言命山代水主産部連輕部造
蘇宜部首祖とてり天照御魂命と火明命也次天香語山命次天村
雲命次天忍男命次建額赤命次建筒草命次建田背命次建諸隅命次

倭得玉彦命次玉勝山代根言命とてり山代根言命ハ山背大國魂命是
也年中行事秋合祈雨
あま雲はやくとてり水ぬいの神よとてりなやとてり

みづもめ 神代紀に罔象女とてり古事記に彌都波能賣神とてり
罔象の水神也神功紀に水葉とてりも同なる倭名鏡に綱鮎とてり
とてり訓一水神也と注せり

みづり 南都二月堂に水取れ行事ありて修二月法とてり釋實忠よ
て始て其事乞身釋書よ委一終に浮屠家此有とてりされと水政
の幸に伊勢御鎮坐の諸記よ委とてりて村雲命の故事とてり康治中臣壽
辞よは天忍雲根命の故事とてり春日若宮に神雲命まゝとてり
其神蹟ありとてり若狭井の廻りよ賢木とてり○伊賀一の井
村より二月堂の水取れるの薪とてり世の能とてりてとてり
也むり村よ道觀とてり隱者あり若狭の南觀とてり僧とてり二月
堂と再興とてり其南觀の堀とてり井と若狭井とてり○万葉集

よ水をけまぬのふくつらるるの羽色と山のまをまよらふけありと
水鳥の鴨のぬ色ももるるなり

みづしけ 亡者の霊は水とまゆるは佛法に知つるは疑あり日本紀に
臣の死す時影姫哀傷の秋は玉筍は飯入りり玉梳は水は盛るるえ
なり

ぶらみ 倭名鉄は湖とよあり水海のまを古淡海とらひ近江の湖は
琵琶湖とらひ其形の似る也海東諸國記に崇神天皇元年開近江州大

湖とらひ我邦此説は幸久しりしとて也讀書管見は南方止水深
淵通謂之湖北方止水深淵謂之海子とるえり西湖の如きは船の往來と

る河也とらり○石花の海は万葉集長きよえり駿河國富士山の戌亥の隅
みづの大湖也猪苗代の湖は陸奥國若松の東笹山近き所也共は近江に

續ての大湖也
みづしき 上は張と帽額とらひ下は張と水引とらひ台記に鶺鴒
よ水引とるえり水引の名は船は据るや又あとりとるるふりとのまよ

慢ありとらり○紙捻の水引とるえり練鬢と譯そりては城殿とて遠

白の色ありとらり後よ赤とまよる書とまよる也五色金銀ふとの後世の
まよりて式堂は用ぬとらひ懐紙短冊女房の髪まよりの水引とるえり皆白紅

一條也とらひ女房飾扱まよるとは水引は四十歳より二條也とるえり
こ水引とるえり物と結は内よるるき用らるるなり

用きみまよるとるえり○まよるる海根也其木の形あり
似る赤白あり矮生のとらるるなりみづしきとらひ金水引と西國とて

らひ水揚梅也○正字通は太祖好水引餅即今之水麩也とるえり
みづの川 伊勢風土記に安濃津仁徳天皇三年乙亥定三津其一也夷方

之並船本邦公私之着船湊入之船各來干此待其風雲奉國之名湊也と
るえり武備志日本考は國有三津皆商船所聚通海之江也陸摩州有坊

津筑前州花畑塔津伊勢洞津三津唯坊津為總路客船往返必由花
畑塔津為中津中國海商無不聚此地洞津為末津地方亦遠とるえり

より博多を那珂郡より三代實録に博多是隣國輻輳之津
警固武衛之要と堀河百首より

海多や博多の懐はかくたうとらう船の時はくろや

往昔ハ博多ハ船來を二百年來ハ薩州周防或ハ豊後ノ豊府肥前ノ平戸
よよみ寛水中よりきり肥前長崎と湊とせり河濃津ハ清盛の坵地
より出船ハ熊野よりきり平家物語より明應中の地震よりきり
湊よりありて大船ハ入りてマノ系大坂江ノ都と云箇の津よりきり
此三津と謬るたうや

自とよありきづり也自身より自與自使自今ふと連用
とら史より又躬又親とよむも同一又身自も連用を身と躬と
のよけく身為國史躬覽載籍とらうて考へり又水故のよ
よオよりりり今と風土よ就ていり○寒具の類よりみ不見辛のよ
よやま 万葉集よりみり瑞山のよらり本かきづりくく
とら也

みゆきき 水壁のよ水中の白莖水中よりゆよとらふよ或ハ行と訓
よ行ハあも也○童のよつくきとらふ事物よ見えより頸とらとらふよ

○まとりふも水莖のよらり喜撰式よ筆のよぐきとらふよ見えより
源氏よ足孫ふ人の涙よあくとら流とらふとらてとらハ白氏文集
小獲麟一句涙與筆俱とらふよらり○新拾遺集よ

水くき此墨の湊乃はのよ人よ教わとらとらハらりり
万葉集よも水莖岡とらり仲哀紀よ入岡浦到氷門とら自洞海入之
ともろそより筑前遠賀郡也同集よ水莖の水城とらると筑前御笠郡
也にも水岫のよらり

つのみら 日本紀よ三才と訓せり天地人の道也○三徑ともらり門
井原の三也源氏よと見えより○周白兼家の子道隆道兼道長あつて
撰政よりせよとれと三道とららして昭宣公の三平よ比と三平ハ時平仲平
忠平也大鏡よも也
とづくりり 倭名欽よ準繩とらみ今水繩ともみづりりといふ

とて天智天皇七年とて位を即せたりとてふ其年と
見えたり三代實録に本朝制令三年之喪為一年周暮之喪亦為五月自茲
以下皆有降殺と見えたりはいつとの代に始りしとて

みくあてりり 古事記よる神代紀よ事定みくあてりり
御伊與(まとい)とれみあてり(一)昔の古語也日本紀の予よとれとていつと
うとてりり雄略記よ與(一)夜而娘(一)とてり

みとのまぐとてり 神代紀よ遺合とてりり舊事紀よ御戸(一)智恵(一)とてり
と御戸の閨門とてりり目合の事也時生とてりり假名たぐり
自合の古事記よ見えりり為目合而相(一)とてりり○上總よめとてりり
ひ信則よ移つとてりり

みくりのとてりり 祈年祭祝詞よ御年皇神とてりり式高市郡御歳
神社同郡大歳神社古語拾遺よ大年御歳神と引つてりり同神
あてりり古事記よ須佐能男命神大市比賣と娶て生大市神次宇迦之御
魂神と有て何とてりり穀の神と坐とてりり古語拾遺よ大地主神の田よ御歳神

みくりのとてりり 盗賊とてりり海道記よ若楯とてりり所と過て横田山
とてりり

みくりのとてりり 宗子(一)成ふ(一)とてりり故とてりり式よ葛上郡葛木御歳神社祈年祭
祝詞よ白馬白猪白雞と備奉とてりり

みくりのとてりり 輿地志よ諸亡命聚藏綠林注よ荆刈山名と見えりり
みくせれつとてりり 戸令よ夫没落外蕃有子五年无子三年不飯
及逃亡有子三年无子二年不出者並聽改嫁と見えりり今とみくせりり公
法侍りり

みくりのとてりり 皆舉成晉命ふとてりり舉已下皆也と注を身成の事とてりり○
端(一)處(一)とてりり水(一)中(一)とてりり水(一)中(一)とてりり也とてりり化(一)とてりり虫(一)とてりりも
らり新撰字鏡よ蜘蛛又蛭と訓せりり和字よ倭名鈔よ河貝子と訓一俗
用錢字非と見えりり山中とてりり誤て泥壁の内よ入數年ふ活とてりり
今俗是とてりりふとてりりか散とてりり任とてりり混とてりり也

みくりのとてりり 皆舉成晉命ふとてりり舉已下皆也と注を身成の事とてりり○
端(一)處(一)とてりり水(一)中(一)とてりり水(一)中(一)とてりり也とてりり化(一)とてりり虫(一)とてりりも
らり新撰字鏡よ蜘蛛又蛭と訓せりり和字よ倭名鈔よ河貝子と訓一俗
用錢字非と見えりり山中とてりり誤て泥壁の内よ入數年ふ活とてりり
今俗是とてりりふとてりりか散とてりり任とてりり混とてりり也

みくりのとてりり 皆舉成晉命ふとてりり舉已下皆也と注を身成の事とてりり○
端(一)處(一)とてりり水(一)中(一)とてりり水(一)中(一)とてりり也とてりり化(一)とてりり虫(一)とてりりも
らり新撰字鏡よ蜘蛛又蛭と訓せりり和字よ倭名鈔よ河貝子と訓一俗
用錢字非と見えりり山中とてりり誤て泥壁の内よ入數年ふ活とてりり
今俗是とてりりふとてりりか散とてりり任とてりり混とてりり也

みくりのとてりり 皆舉成晉命ふとてりり舉已下皆也と注を身成の事とてりり○
端(一)處(一)とてりり水(一)中(一)とてりり水(一)中(一)とてりり也とてりり化(一)とてりり虫(一)とてりりも
らり新撰字鏡よ蜘蛛又蛭と訓せりり和字よ倭名鈔よ河貝子と訓一俗
用錢字非と見えりり山中とてりり誤て泥壁の内よ入數年ふ活とてりり
今俗是とてりりふとてりりか散とてりり任とてりり混とてりり也

みふと 日本紀云水沫とよめりみふと云ふは如氷沫の義也祝詞云青
水沫もまほ同てと見えありのあふお也續古今集云

あふ川にふせすてとやみふと云ふはみふと云ふと消ゆと云

万葉集云水沫をて微命と見えたり大智論云此身四大和合造如水沫聚
虚無堅固とあり

みふと 神代紀云天の御中とらひ誓約之中とらひのみふと云ふは万葉集

上國の中又里のふと云ふは真中の義也とあり○零のふと云ふはとあり
ほき中とありあり

みふと 常上湊とよめり水止人所會也と注しは水止の義とあり或は

港とよめり日本紀云水門とよめりはみふと云ふは意同し古事記云水戸と

あり紀のす万葉集もみふと云ふは又万葉集云湖とよめり○みふ

と川とらふも入海の川とあり所の名ははと云ふは名所とありと撰州の

倭川ハ夫田部郡也平通盛くは戦死し楠正成も云くは終とありあり
みふと 南とらふ日本紀云明字とよめり皆みふの義日の南とらふ時ハ万物

皆明らうらうとありと云ふはとあり○伊勢物語云南風ふきく續日本

紀云天平宝字五年九月横津國御津村南風大吹潮水暴溢とあり

みふづき 六月とらふ水月の義とあり六月ハ田とらふ水成とありとあり

名とらふは月とらふとあり詞也一ハ神略月の上下畧也といふ神ハ雷也

みふと 古事記云御名代と云ふ御名と後世はけんとあり何部とらふ

才成定めさせたまふ後世は比と云ふは又云為ハ田若郎女之御名代定ハ

田部也と見え一ハ舊事紀云詔物部大別連公曰皇后不生皇子以亦大別定

皇子代右号為氏改賜矢田部連公姓と見えあり

みふと 源とよめり水元の義也○皇子と源姓と賜ふ者ハ嵯峨帝乃

皇子源信と始清和帝の皇子と賜ふと云ふは清和法氏と見え又宇多帝の

皇子と賜ふ宇多法氏と見え延喜帝の皇子と元服以前ハ源姓と賜ふ

幸河海と見え

みふと 式の祝詞云若過らんとハ神直日大直日と見え一ハましま

と見えと見えとあり俗ハ大目と見えと見えと見えと見えと見え

みかさ久 神代紀より大臨とよみ見哭の系成り大臨の九傳より

杜注に臨に哭といふ

みかさ久 日本紀より水底経の系より奥よりみかさ久も同

水底経の系也

みかさ久を 水に馴る棹也成見馴の系より

みかさ久にみかさ久といふと同一の見馴川大和守智郡より新

勅撰集より

世の中ハふと倭よりみかさ久といふをみかさ久といふ

みかさ久 皆子餅より又愛敬餅とより清氏より三日夜かたし

らよと也婦と娶り家三日の餅つくり舅姑と秘其教五百八十

五難姐と嫁女三日父母家來餉食俗謂之饀女といふ

媛女と作し

みかさ久の系 北山抄より南海道とより日本紀よりみかさ久の系より

みかさ久の系 源氏よりみかさ久の系より

係されの系といふ河海

みかさ久の系といふ河海

みかさ久の系といふ河海

始に宣命と奉り江家次より祀師著座讀祝詞先讀宣命と

より諸間食止宣命と

みかさ久の系といふ河海

○国月ある時ハ国の晦日と用おさる

七々の天のうりとさる

○天下諒闇の時ハ此後

○後撰集よりみかさ久の系より

みかさ久の系より

みかさ久の系より

みかさ久の系より

みかさ久の系より

みりしつり

△みよへ 日本紀の御膳とよめり御贄の衣也袖中扱ふ大ヤケとよめり
とよめとらふとらり

みよへー 醜とよめり増約の悪醜也見悪き衣なり日本紀よえつ又無
色の字もよめり王褒講徳論の嬖媮倭僂善言者不能掩其醜とよめり○
醜女と譏の詞は西國よぶつとよめりづとよめり袖中錦の胡國の婦人黄色
とよめりて面は塗るは浅佛粧とよめり

△みぬ 不見の衣也ふく互ぬ也

みぬさ 御幣の衣也万葉集扱ふ諏訪明神の衣と花とよめりてみ
ぬさとよめりしつりもええふり或は御麻とよめり

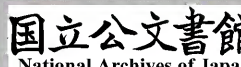
みぬめ 不見目の衣也○敏馬の浦の津國より後人訓一謬とよめり
まくとよめりすけりり万葉集扱ふ風王記と引てえぬめの神へり能勢郡敏
馬山よりしつり神功皇后のよめり船と造りけりしつり

△みよ 倭名扱ふ嶺峯とよめり大根の衣成ア一○刀のみよとよめり

みよかきー 古今著聞集よるえとよめり俗よむ任とよめり刀背也異朝よ山
背と峯とよめり屋脊と棟とよめり其衣同一○倭名扱ふ梁とよめり
鼻梁とよめりみよ脊とよめりみよとよめり

△みの みの國の古事記よ三野とよめり衣成ア一國よ大野三所
ありとよめり舊事記よる也本巢郡よ美濃とあり○蓑とよめり身荷の
衣成ア一詩よ何蓑何笠とよめりり万葉集よみのうさきとよめり
る人よれ伊勢物語よ蓑と笠と取あれとよめり延喜式よ檜柳
馬蓑蜷蓑登美蓑の名りり夫木集よ山管とよめり新撰字鏡よ
駉とよめり為家卿

みよの野かよらつるもとの毛成みく世とよめり苦とよめりれ
○竹葉とよめり編と合柱とよめり赤類也○古今集よあり衣たとの
とよめり説文よ蓑雨衣也とよめり意也○倭名扱ふ藁子とよめり實
の毛の蓑よ似とよめり今とよめり新撰字鏡よ藁と田とよめり
藁と田とよめりみのとよめり○俗よ藁の芒とよめり藁子とよめり



実芒の訓より蓑も轉用す。○蓑鳴ハ筑前より檜垣家集より蓑尾濱も筑前也蓑浦ハ尾張より増基遠江紀行より

みのふ 實とてつひつひ詞也のり蓑は月令ニ登とより○昌泰二年六月ハ藤花祀祀不著花而實ともえより

みのり 孝徳紀ニ正教とより御法の云佛法とより也○みのりれは法華也慈圓

みのろとも 蓑代表の衣也ハ雲御杖ニ雲は付蓑の代ニ云ふも

みのろとも 蓑代表の衣也ハ雲御杖ニ雲は付蓑の代ニ云ふも

みのろとも 蓑代表の衣也ハ雲御杖ニ雲は付蓑の代ニ云ふも

みのろとも 蓑代表の衣也ハ雲御杖ニ雲は付蓑の代ニ云ふも

の別名としてキニハ用おもとつり此の代ハ身價也○今も船人の給料としてのちろとつり古ナリ

唐詩ハ何日平胡虜良人羅遠征の意也定家云蘇武耿恭故事とわらん

△みりー 禁裡宮殿の階とつり○みりーは陛下の衣也○みりーの櫻ハ南殿の栞也年中行事ニ合もえより○みりーハ木集より

石見那賀郡の坂也

みんがー 日本紀ニ釵も刀も訓アリ万葉集ニ御佩と釵の也とよみ

かー互き也○古事記ニ御カとよみ御カノ字後漢書より

部日記ニ宮ハ殿抱きよりてみんがー小女將の召とありハ守カハ意也淮南萬畢術ニ拔劍倚戸兒不夜驚とえより○古事記ニ所御佩とみんがー

名正しく入るる是ハ鑄斧の執とらり○大殿祭祝詞ハ以テ津御量五
事問之磐根木立そとそとるハ智謀といふ也○伊勢年中行事
ハ正月十四日夜水量立事ニ測月影占年豊凶名水量とそとる○御
量柱ハ忌柱の事也

みくろひ 日本紀ニ覽とらり祝詞ニ見齊志堅國とそとる今
くくといふりるる及ら也日神ニ就てらり

△みひ 古き物ニ御火去るくくくく○古事記ニ按とみひとらるる
御ひの事也神代紀ニみひとらるる方なりはアヒとありてアヒの古
字ありとまゝでカの誤とそとるありとらり

みひまじし 御火申也大神宮倭葬の時より事也

△みふ 物語ニ多くも御封の事也とらり太上天皇二千戸三宮各千
五百戸ふとの封戸とらり官符とらりて其地の正税とらるるなりて
國ハ皆國司の吏務とらりて庄園の如く不輸の所成立て國司不入のたぐひ
よらるる

みぶ 壬生とらりみ産の略成一拾芥抄門号の條ニ美福門ハ壬
生氏の造とらりなりとそとる事也又あふもらり○日本紀ニ乳

部もよめり同ふも

△みよひ 恋よめり癒るをらり万葉集ニ

一そつ妹むむひ一草とすくニそよひへく我方の事也

文選古詩ニ相法日己遠衣帯日緩くとそとる

みへかり 万葉集ニそとる壬生忠岑家集ニ石見写三重の川波とよ

あり那賀郡黒川村也といふハ雲御抄也石見とそとる今伊勢三重
郡と川ハあまこりそとるみよひ川とらり一ふ万葉集ハ伊勢成へ

○古事記ニ到三重村之時亦詔云吾足如三重而甚疲故号其地謂三重
とそとる是日本武尊の故事とらり三重郡とらり

△みか 御穂の松原ハ駿河有度郡也古ハ御廬浦とて盧崎の清毛園より

讀方三穂崎ハ出雲國也日本紀ニ之の後方御廬隱岐國遷幸の時うき目と
みかの後千とらりてたらり一所也三穂石室ハ紀伊國也万葉集ニみか

みづり 京東の職塚に豊大閭朝鮮を征せし時の職也といひされし
 高麗陣日記に鼻塚といふて後の高麗攻の時に行道よての本朝朝鮮
 軍記に或は鼻きり或は耳きりといふより懲咎録にも元得我國人悉討
 其鼻以示威といひ侍よるに割之取之欵在傳よ以為俘職といふ意
 也又神功皇后三韓退治の後筑紫の前田といふ所よ夫の塚ときりし
 たまふてきりみといひしと今誤つてきりみといふより四季物語に
 見えたり又伊豫守頼義奥州の夷賊とて平けく敵のきり耳ときりし
 の草籠二合よ入てしりのわり土壇の下よ理め堂を建立し是を耳納堂とい
 ひしと誤てての堂といふより古事記に見えたり大坂陣の時よ鼻を
 きりしよりいふ事よのよ見えたり文選よ献馘萬計といふより

△みひら みゆら二同一神也とのに記されたりあるに城上郡の三輪山
 と赤室山とも神祖いふもいふ是也万葉集よ神多みの之室の岸とい
 う、一ハ平群郡也神多みの三室の山といふあるに葛下郡の三室山也とい
 うと立田川といふと合せし心はぬより安沖といふ所のいふく吹之室の

山の記をみよるに後拾遺集よ内裏欵合よよめりあり是は古今集よ

立田川紅毛きりし神多みの之室の山よ附あり

立田川紅毛きりし神多みの之室の山よ附あり

とらる二首の心詞と全く用ひてある事よあきと申よとよ高吹

きり多き侍りよるよりてきり多き侍りよるよりてきり多き侍りよるより

考契沖の記よりし喜ばらるり父の肥後守橘元愷能因う俗名に承

愷○出雲大原郡の御室山に神須佐手命御室と造りしとありて風土

記よ見え○五十番欵合よ

これ御座所をみわらとらへ成りし御傍も同一今仁和寺とたゆら
祓とらも同云々

△みめ 東鑑は眉目とありまゆ成約ありみとらふ如く今俗めと
とらう容貌をいひ辞也又盛華ともみめとらり天正中慶光院に賜
り遷宮の時の倫紙は美目とらゆ○日本紀は祀す女御とあり御妻
の系也とらり源氏とらみしのみめをえとらえん

△みとろ 神代紀は三輪の事と三諸山とせりしを三輪山と限りたるを
よとらも万葉集は三諸つく三輪山も三諸つく鹿背山もとらえて御座
の系神社とらしとせされは万葉集よとらるる三諸の事と境又吾屋
戸は三諸と立てとらみ神楽やも神の御座と行ひとありん
ふと一鴨祐世とみとらるるさか記とありも同一別てはふととて名と
負せら大神代尊とあり一祭とらハ賀茂の祭山とらハ日枝のふとら
如く○山城紀伊郡御諸神社ハ伏見の益香宮と称とら是也天正中大龜
谷の八科嶺と遷りて城隍神と慶長八年に復故地鎮むと八科嶺

を古御香と呼し舊記は白菊神祠と呼るハ重陽は菊也とらてとらと
とらり
みりみ 催馬楽とみとらむとむしとら日本紀は冷水成とむきみ
りひとらるる是也たひとら同一

△みや 宮とあり街家の系也とらり○宮中ハ殿の宮ハ大各殿ハ小
各是宮殿のまじ宮号社号のなもまき准一○古ハ貴賤とら所と
まし稱と秦とありて定め至尊居所の称とらり秦漢以前のま
ハ殿の名かハ史記ハ秦始皇作前殿阿房とらえり阿房宮の内ハ前殿
にら也○皇子皇女の家と宮とららハ多葉集ハ高市皇子宮大津皇
子宮とらる○神社ハ宮とららハ伊勢の事とらてとらとら
と伊勢ハ限らり○番とらとらとらり万葉集ハ日本紀ハ檀日言
ありて延喜式ハ檀日朝とらゆ神名式ハ公朝の事と載ては芋枕ハ
大帯姫朝神社とらとらハ廟ハ神社とらとらとら陵とらとらハ別ハ
祭一○姓ハ文時あり兼久官軍の将とら

みやこ 都といふ日本紀に京方集に京師とよみ又華成といひり宮所の名
也といひり菅家万葉集に城といひり ○朱雀門といひ羅城門といひ大道といひ
是より大道の東の方を東のといひ左京洛陽といひ是西の方を西
のといひ右京又長安といひ是也称徳紀の歌にふ詩乃美也古波寺呂
豆乃美也といふなり ○わりの宮所をといひみやこといひり 幸前京都
郡あり日本紀に云々又万葉集に云々秋

いづくも君まはるく成花はくくはくふふめみやこなりなり
文徳實録に祇四位上和氣朝臣仲世奉公忠謹毎至寢卧看向宮廟と云々
清鷹第六子といひ天性至孝といひり ○みやこ社に城下郡といひり鷹戸宮の社
也類聚枚に

還行人三輪の山邊成まろといひ宮に社の名を云々
○玩球の南に宮古嶋あり中山世鑑に云々明入いしは太平山也云々
鳥羽浦につき一玩球の漂船に即公宮古嶋に米積の用ありり船に
て八人乗合せり廿日といひの漂流といふ ○伊勢一志郡に云々村あり

信濃に云々いありま集に云々

みやけ 日本紀に菅家又屯倉をいひり古事記に屯家といひ屯
宮食の系也内裏式に十一月美御宅田稻敷式ありて三宅田若干町と
云々いひ御宅も三宅と同し諸國に田部といひ屯倉といひと興いたす
景行天皇の時屯倉の凶年罹之穂稲年久而不蝕也西土の系倉社倉
永又よ不行 ○三宅も屯倉と同し氏姓所名といひ官府の類也尾列のみや
け津嶋天王の本居あり一國分寺と此に在るといふ ○三宅嶋に北條早
雲を得る所云嶋に近し云々いひ者其後年歴く免され歸り
小ふといひ大西風といひいづりといひ東へ行来幾百里といふ事あり日本よ
り小東へ七百里も行といひ思へ其處に朝日の柱といふ夜の明人
と云々いひ紺碧の層雲海の東よりまうりやうて大陽海より升り出日と
大に二十丈といひり云々いひ太白星いまを張るあり其大に傘のてく日の
升る事極く早し其寒極寒の時ふれいと盛暑の如し人衣を脱ぎ
頭上より物を置く暑を凌ぐ計あり暫ありて日と云々いひ次子に冷氣あり

成りし時節相應の寒氣也暫ありて風變り東より幸しく思ひ帆波
上よりくく西より帰る始終廿日ほど歴く臘月廿七日に江戸に著李白ら
詩に所謂巴陵洞庭日本東と云はるるなり

みやま 日本紀に大山をよみ文選に岬をよみり顯昭の深ふをよみり
らまると日本紀の系集よみえとよみ真の系をよみれの意に通せり

みやび 日本紀に風姿又且閑とよみりふり也ふり又ひ也古事記に
曲の風俗といふは又人振らり○万葉集に遊とよみりみやびとよみり○繼体
紀に藻と訓せり文藻とらむ伊勢物語にいとみやびとよみりみやびと
らむ是也

みやびと 宮人といふは日本紀にるる職負令に婦人仕官者總号曰
宮人の系也よそむふもと訓せり古語拾遺にるる宮人のわがよそ
かしのきりり万葉集によみり其後のキハ仕官の男子とも通しらり
○神のまゝ人の神職の人をらり古事記万葉集よみり伊勢よそみやびと
らむ是也

みやつこ 日本紀に國造といふみやつこ伴造といふのみやつこといふあり

造字に北史に新羅官十七等と擧げ中第十七と造位といふよふなり
みやみやつとらり轉らるる語成り或は御臣の系よそ其國郡を治む
其部属と掌らるればみやみやつ○キハ敏達といふみやつこといふ
るに顯昭説に主殿寮の下部也といふ御奴の系也今に官奴同らりみやつこ
さといふあり

みやつこ 漢書に勢交者近勢尽而亡といふなり○續後撰に世にまつこの神の
みやつこといふは同の意にや又御奴の系にや住吉に神奴氏らりみやつ
こといふなり

みやまの 拾芥抄に宮内祭ありて宮内五柱笠間廣前といふに姓氏録に神
宮部造ありてといふ宮能賣神より出て宮能賣公といふに轉らるる也宮
能賣神に大物主神と稱しよる旨をまゝに姓氏録に出入り造酒司坐神大宮賣
神社四座を亦思と致といふに八神殿に祭る大宮賣と事代主の前よあり

○大明神の悲華經の出り○明神の号古勅命よりなり文徳実録より
以近江國散文難度神列於明神の類の如し今其の終るに借せり也

みやいそー 大殿祭祝詞に宮進米進宮勤勤之米^{ミヤノメノミヤノクマノメ}進とるの宮進と
朝参とらひ宮勤の職掌といふことと一きり也

みやうじん 神鳳杖に諸國神戸御厨御園神田名田等とる又飯高
郡に神戸名田あり又立野名次男名あとしひ東鑑に伊勢驛家の
重安名田あり又永平名松永名あとしひも多し名田古作と名目よ

らつ他々其田地ありて出作の謂は漢書の注に名田、古田とるえり
名とむわりの村より小きふといふ也とて又別名はり名とるわりの豊前

ふとにまきり今伊勢東名郡に殿名とらふ村あり是遺名也
みやびくぢり 古事記に此致者宮人振也とるも其初句にみやひとの
らつ成りて也

みやこのたつこ 喜撰よりみかしの山城の宇治也長明より
これにまきりては夜に宇治の山よりとるわりの

とらみし伊勢度會即内宮御鎮坐の地也徒然草に大神宮の遥拜辰巳
よむせり南よりとるえり

△みやゆ 万葉集に所見とらるるみやゆ也るみやゆすよみやゆとるる
音第三の同韻とるれとてとるるゆのよるゆゆのたゆるゆゆのよとる

ゆゆゆゆとらりこれと拾遺集に垣根の柳まきりての中を亮致令り
ひらり松の葉ありてとるるもゆまり方葉集にもゆ格とるる

とまきり○神社の探湯とらり録倉右大臣集にまきりみやゆたてとる
とらりわとるえり

みやゆき 行事とらり御行也今上は行幸とらり上皇は御幸とらり
西宮記ふりよりとるる三代實録に其分りてとるる

とらり亭子院大井は御幸ありて行事とらりまきり也と作ゆる事
のより奏せんとりて貞信公のよみたまふも今よりひのみゆふまきり

んとらり又北山抄に御行も去せり東鑑に御行と去せり音と
とらりふりや○大雪とみやふとすよとらり左傳に平地尺為大雪

とらり

とらり

と見えたりみみ大の者也とありたり行事成りてはるもなり○日本紀
よ後後とよあり身往の者也

△みよ 神代紀の候とよあり見よれ者也

みよれ 大和の芳野とよあり又よれ田よえよれ望あり新里一

大井川山嵐山等の名あり後村上帝の行宮也とあり又武藏國入間郡も

あり伊勢物語よえ川越ありみみかめなる詞真の者万葉集よ

真熊野も三熊野もとあり如し

△みろ ともえとよありみろとよありみろとよありみろとよありみろとよあり

みろ同意成り

△みろ

見とよありみろとよありみろとよありみろとよありみろとよありみろとよあり

異記よ瞞又歌とよあり○倭名抄よ海松とよありみろとよありみろとよあり

みろとよありみろとよありみろとよありみろとよありみろとよありみろとよあり

勢物語よはきふくありみろ○深海松万葉集よあり延喜式諸國の

貢ふと長海松深海松あり○源氏重女の名よみろとあり海松子よ○
万葉集よ布よきねのみろとありみろとありみろとありみろとありみろとあり

みろぶき 幼女の髪は海松とよありみろとよありみろとよありみろとよあり

みろきり 神代紀の顧盼之間とよあり見目疎の者也

△みろ

東國の俗見とありみろとありみろとありみろとありみろとありみろとあり

詞盛衰記よえあり古事記よ美名浪神よえあり

△みろ 三輪とよあり三葉の説いとあり式大和城上郡大神大物主神

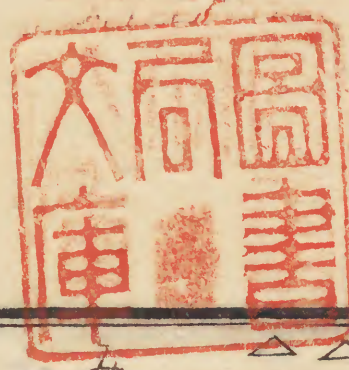
社也靈時のとあり宮殿あり故實とあり昔上郡大穴持神社と三輪

明神とあり拜殿鳥居のとあり同く故實あり一説よ曲玉幸魂^{サキ}奇魂^シの三の

玉の幸大己貴神の故事よありみろとありみろとありみろとあり

みろの輪は法くきあり衣とありみろとありみろとありみろとあり

みろの謡よえあり金剛經よ無所從來亦無所去故名如來の意とありみろ



信言子... 三

忍徳井也といり下御井ハ高宮の麓より別宮の御饌と炊くは用う
石井神社ハ内宮の名社岩井田山あり○御井神社ハ出雲秋鹿郡出雲
郡大和宇陀郡美濃多志郡各務郡ふとよ少座摩御巫祭神生井神
社福井神綱長井神とえり臨時祭式ニ御井祭あり御井神ハ大己貴
神の子也古事記ニ少

△みま

みれー 水押の者も又みよーとらり古ハみよーとらり

いり或ハ龍頭とと称と舟の製表といり一さきの処也

みれとと 万葉集ニ御面とよめり又面輪とよめり又面輪とやり

とよめり面輪ハ梵書ニとよめり

みれやのうみ 此ニとよめりハ多ク加茂の明神とよめり○日本紀ニ皇祖

とみおやとよめり古事記ニ御母成御祖とよめり鴨之御祖ト即御母也

父母とんておやとらりハ借言也

倭訓栞前編三十終

